

# 巻 頭 言

むなかた電子博物館紀要委員会

委員長 平井 正則



春一番も到来、九州は待ちにまった温かい日射しがのぞく今日この頃です。

本紀要は、むなかた電子博物館らしいテーマの取材経過をおぎない、活動の姿勢にかかる歩みを記録することを留意して、つまり、博物館の裏方さんとして、あるときは紙媒体には掲載が難しい大量の記事も掲載に努めました。樹木をむなかた電子博物館とすれば、この紀要は辺りに伸びた地下根にあたる、決して、無視できない活動の部分を担ってきます。

今号では、これまでのこのむなかた電子博物館の活動をふまえ、賑やかな将来の発展を胸に、その在り方の特集が組まれました。

また、特に、東海大学福岡短期大学 28 年の歴史の終わりにあたり、神山学長先生からの短大の進展と終焉までの経緯を含む貴重な記事を頂きました。若干、内輪の話ですが、“箱もの”博物館ではなく、国内でも珍しい、むなかた地域全体を博物館とする、というむなかた電子博物館の発想と見解は、実は東海大学福岡短期大学スタッフの多大な努力、そのユニークな発想、そして具体的な活動に多くを支えられてきた事実を忘れてはなりません。もちろん、スタッフは宗像市で生活する市民であります。この地の特有な地勢、歴史的遺産、注目の沖ノ島遺産、考古学的遺産など、文化・歴史の活きた博物館が、当地の文化的、教育的拠点のひとつ、東海大学福岡短期大学の教職員・学生の皆さんから、多くの重い支援を頂いたことは、むなかた電子博物館の宝にも等しいものと認知し、ここに記録し語り続ける必要があります。

地域における文化・教育を語る際、大学・学校など教育機関の存在は、近年、特に重要な位置を示しています。教育機関の活動がともすれば市民の不満、地域エゴと衝突する反面、これらの教育機関がいかに文化・教育や市民への未来を明るくしているかを忘れてしまうことが多いのではないのでしょうか？市民の手作りだけで文化と教育を進展させるのは不可能です。教育機関の日常的な永い歩みと活動が、いかに人・文化・教育を支えてきたかを確認することが常に必要でしょう。

神山学長先生の寄稿から私たち市民は学ぶべきです。そうして、宗像市のさらなる発展を、全国でも珍しいこのむなかた電子博物館の活動を前進させるべきと考えます。

今回の紀要は、改めて特集ばかりでなく視線を上げた紀要として、市民の皆様にご提供できたものです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。